

彷徨える

——受賞作品概要

飯田未和

1

修士課程一年の私(和泉)は、動物実験をする研究室に属している。ラットの解剖が終わり、同期の永井と二人で動物小屋と呼ばれるプレハブ小屋の後片付けをしていた。

永井は大柄で強面のバスケマンだ。父親が教授の友人で、「コネで入った」と自ら言っている。そのせいか、研究についてはいつも消極的だった。

永井が動物小屋の窓を開ける。新鮮な空気とともに、隣のテニスコートから楽しそうな掛け声やボールの弾む音が聞こえてきた。大学は長い夏休みの最中だった。

私は自ら望んで他大学の院に進学した

い網が現れてトカゲを覆った。

小柄な男がいた。男は網の上からトカゲを掴み、目の前に差し出す。私は捕虫網の隙間を覗く。触れてみようとする指を近づけると、トカゲは隙間から逃げた。

「捕まえて、どうするつもりだったんですか」

私が尋ねると、男と初めてまともに目が合った。色白でどこか幼く、感情の読めない顔をしている。

「餌にするんです」

そう言って立ち上がると、男は動物小屋の方を見た。桜の木に立てかけられたケージ、白衣姿の私と、動物小屋をゆっくりと見比べてから、男は口を開いた。

「あそこにねずみがいるんですね」

私が黙っていると、男は視線を雑草の中に落として去った。

院生室に戻ると永井は帰宅していた。先生が焼肉をご馳走してくれるというので先輩たちとついていく。

酔いでふらつきながら、自転車ですーパーに寄ってからアパートに帰った。玄

ので、家族も友人も近くにはいない。朝から晩まで研究室か動物小屋にいたので研究室内の人間関係ばかりが密になっていった。

作業台の上には解剖されたねずみが一匹残っていた。大きいので、開腹された遺骸にはかなりの存在感がある。永井が嫌がるので私が後処理をする。この二ヶ月間ほとんど毎日世話をしたねずみだ。よく懐いていたので、麻酔をかけようとしても暴れなかった。

遺骸を丸めて自然な形にし、紙ウエスで包む。それを布テープで巻いて動物小屋の冷凍庫に入れようとしたが、入らない。

冷凍庫も冷蔵庫も満杯だった。ねずみの糞尿に濡れたおが屑と共に翌日捨てに

関を開ける。靴を脱いで中に入ると部屋の奥からわらわらと「彼ら」が出迎えてくれた。飼ってきた桃と、新しい飼料と水を床に置く。

餌に寄ってくる彼らを、床に敷いているラグに転がって眺める。楽しそうに部屋の中を走り回る「彼ら」の気配を感じながら、私は眠ってしまった。

2

真夏の炎天下に、帽子もかぶらずリヤカーを引いていた。リヤカーには、解剖したねずみの死骸と、使用済みの注射器、ケージに敷いていた糞尿まみれのおが屑がみっちり積まれている。これらは専用の焼却場で処分することになっている。焼却場の手続きを済ませた帰り、永井がリヤカーを止めた。門の手前にある実験動物用の慰霊碑に向かって手を合わせる。慰めるべき魂はここにはいないのに、と思いつつも私形だけ目をつぶって手を合わせた。

永井が、「解剖の日は匂いが気になるから、ジムの大浴場につかって全部着替

行くことにした。

動物小屋の奥には飼育室がある。「遅くなってごめん」と声をかけながら、ケージを一つ一つ覗く。ラットは皆元気に水飲み器をガチャガチャ鳴らして新しい水を催促している。

一つのケージに数匹ずつ同居してもらっている。ケージを持ちあげるとずっしり重い。おが屑も汚れが激しいので二日に一回交換している。水飲み器の洗浄と餌の補充は毎日だ。動物の世話は研究室内で下っ端の仕事になっていた。

永井と手分けしてねずみの世話を。作業の終盤、洗ったケージを小屋の前の大きな桜の木の周りに立てかけて乾かした。永井が何か言いたそうな顔をしてそばに立っていた。「あとやつとくから」と私が言うと、永井は軽い足取りで去って行った。

乾いたケージを取り込もうと手をかけた瞬間、雑草の中で何か青いものが動いた。日が当たると金属のような光沢を放つ、青く長い尻尾を持つ小さなトカゲだった。トカゲを追いかけると、不意に白

えから家に帰る」と話す。持つて帰らない、という感覚が永井にあることを私は知る。初めは、確かに私も持つて帰ってしまったのかもしれない。今となっては、連れて帰ることが自分の義務のように感じている。

初めて「彼ら」の存在を感じたのは、最初の解剖から数日後のことだった。ふと、部屋の中に何かいる気がしたのだ。

視界の端を白いものが横切り、ベッドの下にも生き物の気配がした。怖くは無かった。ねずみが私に会いに来てくれたのだと思うと嬉しく、親しみすら感じた。

次の日から餌と水を置くようにした。どちらも手つかずのまま翌日に交換することになったが、「彼ら」が喜んでいるのはなんとなくわかった。

解剖の度に「彼ら」は増えた。すべてのねずみが私の部屋にいるとすると、もう百匹に近い。

先生と先輩の杉本さんに連れられて、真上にある浅香研究室の飲み会に顔を出

した。机の上にテニスボール大の迷彩柄のカエルがいた。研究ではなく趣味で飼われていたものだった。

「私も何か飼いたいです」と先生に言うと、先生は意味ありげな笑みを浮かべて「ラットがいるだろ」と返した。

浅香研の佐野という男が、ミナミイシガメを一匹くると言う。元は津久野という院生のものでらしく、何人かが津久野の噂話をする。津久野はヘビマニアらしい。そこに津久野が無言で入ってきた。動物小屋の前で会った男だった。彼の虫かごの中には小さなアマガエルが二匹とヤモリが一匹入っている。

私は亀をもらうことにした。順調に育てば直径三十センチにもなるらしかった。育て切れるかどうか、ふと不安がよぎる。「捨てるくらいやったら殺して」と佐野が言う。

「それ、家のヘビに食べさせるんですか？」

私が虫かごを指して聞くと津久野はじつと私を見た。

「暑さで食欲を無くしているみたいなん

われた。彼の言い方は、他の研究室の人から投げつけられるような責める言い方では無かった。私は自分がどうして欲しいのかわからないまま、衝動にかられて「彼ら」のことを話してしまう。津久野は何かを考えているようだった。

動物小屋を出てから、「ヤモリ、食べました？」と聞くと、津久野は黙ってしまった。しばらくして、家にヘビを見に来ないかと誘われ、連絡先を交換した。

院生室に戻ると、永井の姿は既に無く、杉本さんが私を待っていた。杉本さんが昔に使った骨折モデルの論文を渡され、見ておくように言われる。関連の論文を検索しているとたくさん出てきて、既に研究されつくしているように思えた。

「普通に解剖するより、可哀想ですね」私がそう言うと、杉本さんは「余計なこと考えんな。することいっぱいあるやろ」と静かに怒りを表した。

しばらくしてから、「和泉さんはラットを見習うべきやな」と杉本さんに言われる。どういう意味だろうか。わからないまま「はい」と返事をした。

です。目新しいものがあれば食べるかと思つて」

「じゃあ早く帰らないと」

「ですね」

ふつと津久野が笑つたように見えた。帰宅すると、自分の部屋の前の壁にヤモリがいたので捕まえた。

3

動物小屋で永井とねずみの世話をする。亀をもらう話を杉本さんから聞いた永井は、「友達できていいっすね」と言った。バスケットボールだった永井もまた、大学院で孤独を感じていた。

永井は就職希望だ。私は進学希望と言いながら悩んでいた。大学院に来たのは「研究者としてのセンスがない」と言つて私をふつた恋人に対する対抗心からだった。悔しくて、浪人までして研究費の潤沢な国立大に入った。

ねずみを飼つて、殺して、分析して。その繰り返し先が見えてこない。何かに貢献しているのだという「手ごたえ」が欲しかった。

家に帰ると津久野から都合を尋ねるメールが届いていた。杉本さんに怒られた一件を伝えようと長々と返信を書き直して、全文を消去した。初めから書き直して、実験の都合でしばらく忙しくなると短く書いて送信した。

目を閉じて想像する。ある日注射で眠らされ、目が覚めたら足が折れている。激痛があり、思うように足が動かせない。しかも尻尾が天井に固定されていて手しか使えない。私ならどうするだろうか。絶望しないだろうか。

「どう思う？」

問いかけても「彼ら」の返事は無い。

5

骨折処置を三日後にひかえた金曜日、津久野と夕食で夕飯を食べながらお互いの研究の話をした。津久野はハブの攻撃行動について研究しているらしい。ハブの問合いの話の後、津久野はハブよりも獲物に巻きついて絞殺すタイプの方が好きで、家にいるのはそういうタイプだと言った。ヘビの話をしているとき、津

研究室に戻ると、自分の机の上に小さな水槽が置いてあった。津久野が亀を持

つてきてくれたのだ。永井が津久野のことを知ったがり、杉本さんが説明をする。津久野は外部進学で、飼っているヘビを腕に巻きつかせる「変態」だと言う。永井はそのことに生理的嫌悪感を示したが、私は嫌だとは思わなかった。

浅香研に津久野を訪ね、「トカゲを逃がしたおわび」にヤモリを渡す。津久野は喜んでいようだった。

亀の名前は、永井の発案で亀吉になった。

4

亀吉が二まわり大きくなり、夏休みを終わった学部生でキャンパスが賑わいだした頃に、先生から新しいねずみの世話を頼まれた。骨折させて筋線維の変化を見る実験だと聞かされる。

動物小屋で一人ねずみのことを考えていると、津久野が訪ねてきた。動物を見たいと言う。二人で飼育室にいくと、津久野に解剖するのが辛くは無いのかと問

久野の手首に赤い傷があるのが見えた。牙の痕のようだった。

私は自分が修士論文のテーマを決めかねていることと、先生の骨折実験について説明した。「ラットを見習え」という杉本さんの言葉について、津久野は「すぐにはわかりますよ」と言った。

津久野の家に招かれる。料理は一切しないと聞いていたのに、短い廊下のキッチンにある一口コンロには鍋が載せられていた。

カーペット敷きの六畳ほどの部屋の片方の壁は、天井までの高さのメタルラックに覆われていた。各段に小ささまざまな水槽が並べられている。反対側の壁にもメタルラックがあるようだったが大きな布がかぶせられていて足元しか見えな

い。

初めて間近に見るヘビに圧倒された。津久野は、順に彼のヘビを私に紹介してくれた。私は、ボールパイソンというヘビの胴体の一部が他よりも目立って太いことが気になった。「このヘビは何を食べるんですか？」

私が尋ねると、津久野は微笑んで、「ねずみ、です」と言った。コンロの上の鍋で茹でてから与えるらしい。津久野は上機嫌だった。

「ヤモリは、どのへびが食べたんですか？」と私が尋ねると、津久野は「見せたいものがあるんです」と言つて反対側のラックを覆っていた大きな布を端から剥いだ。露わになつたのは津久野が作ったへびの骨格標本だった。津久野は生きていたへびよりも骨の方が好きだと言つて居る。

津久野は、骨にするためにへびを殺しているのだつた。飼っている動物を殺して標本にするなんて——そう思う私の手を掴んで引き寄せ、津久野が言う。

「和泉さんならわかるでしょう。彼女はもう飢えることも苦しむことも、老いて死ぬことも無い。……そしてずっと僕のそばにいてくれる」

私は抵抗した。「私は、違います」という言葉に、津久野は表情を失つた。迷いながらも、私は彼の手をそつと握つた。アパートに帰ると、前よりもはつきりとへびの姿が見えた。へびに寄り

を見習え」の意味が少しわかつたと杉本さんに伝える。咽喉に違和感があり、帰ろうとして駐輪場で佐野に会つた。亀の冬越しは難しいのでヒーターを買うように言われる。鋭い痛みが喉を刺激する。佐野から、津久野が休学して実家に帰ると聞いた。

8

解剖二日目、最後の一匹になつたところで先生から執刀するよう言われた。咽喉の痛みに耐えながら解剖をやりきつた。

家に帰る途中に目に付いたクリニックに入り、急性扁桃炎と診断された。点滴を受けながら眠ってしまう。駆けつけた永井の車で家に送ってもらおう。アパートに着くと、永井は食べやすいものを買いにスーパーに向かつた。部屋に入ろうとして私は立ち止つた。この手で解剖したので、へびが消えているのではないかと期待した。

部屋の中に声をかけても返事は無い。ぞくぞくと寒気覚えながら意識を耳に集中する。へびの足音は聞こえない。

り添つても温かみは感じられず、私は津久野の温もりを思い出しながら眠つた。翌朝、院生室に行くとき亀吉の水槽が匂つていた。忙しくて世話を怠つたからだ。飼いだした頃の新鮮味が薄れているのも事実だった。私は亀吉をアパートに連れて帰ることにした。

6

骨折の処置が終わわり、ねずみの麻酔が覚めるのを待つていた。目を覚ましたねずみは肢をひきずりながら水と餌を求め、私は自分がひたつていた感傷に意味が無いのだと悟つた。彼らはただ生きて居るのだ。

亀吉が大きくなったので、永井と水槽を買いに行った。ヒーター付きのものは高く買えず、蓋も無い大きな水槽を二千円で買った。

大学に戻り、解剖のことで永井と言ひ争ひになる。「そりゃあさ、気持ちのいいもんじゃないけど。科学の進歩に少しでも貢献できるならつていう気持ちは無いの」

へびは部屋の隅にかたまつていた。前よりもくつきりと姿が見える。肢をひきずっているものが何匹か混じつていて、目眩を感じた。

私は異変に気付いた。亀吉が来ない。「死んでまうで」という佐野の言葉が頭の中で聞こえた。部屋のどこにも亀吉がいない。ざわざわと嫌な予感がして、私はへびのいる一角をかき分けた。手にじつとりと冷たい質感があり、へびはわらわらと部屋の中に散つた。

永井を責める気持ちは無いのに、止められなかった。「誰かがやればいいことでしょ。俺はやりたいくないです」

自分がやつても無駄に殺すだけだと彼は言う。

その夜、アパートに戻ると亀吉を新しい水槽に移した。へびの水と餌の器は念入りに洗つて棚にしまった。

7

骨折させてから四週間が経とうとしていた。津久野からは連絡が無く、私も解剖までは津久野のことは考えないようにしていた。

家に帰ると、ごとりごとりと亀吉が玄関まで出迎えてくれた。寒くなつてまつたく餌を食べなくなつたので部屋に放すことにしたのだ。へびのことは無視していた。

もつと目の前の実験や解剖に集中しなければ。そう思うと神経が昂ぶつて眠れない日が続いていた。

翌日は実験室に籠つていた。「ラット

目を閉じた亀吉がいた。かろうじて生きて居るが、すっかり軽くなつていた。どうして良いかわからず、洗面台にぬるま湯を溜めて亀吉を入れると、亀吉が啼き、死んでしまった。

ごめんなさい、と繰り返しながら亀吉の亡骸をキッチンペーパーで何重にも包む。へびは私の周りに集まつていた。ふと背後に別の気配を感じた。ごとりと音がする。

第九回神戸エルマール文学賞受賞を祝う会 第九回総会（基金会員・維持会員で構成） 第九回受賞式及び祝う会

日時 二〇一五年十月二十五日（日）
総会 十三時から
受賞式及び祝う会 十四時〜十六時
場所 ラッセホール 二階「ブランシュローズ」の間
〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-8
電話078・291・1117
会費 七千円